「二人の母」
列王記上３章16－28節

今日の聖書には、ソロモン王が神さまから与えられた知恵を用いた一つのエピソードが語られています。話の内容は至ってシンプルです。一人の赤ちゃんを連れてきた二人の女の人がやって来て、どっちがその子の母親かとなった時、王様が「赤ちゃんを半分に切って、両方に与えろ」と言うと、片方の女の人が、「そんなことしないでください、もう一人の女の人に上げてください」と言って、もう一人の女の人は、「子どもを半分にして渡してください」と言うと、王様は、最初の人が本当の母親だと言って、裁いたという話です。この二人の女性を便宜上、A子さんとB子さんと呼びます。B子さんの方が嘘をついている人です。

当時の王の役割の一つに裁判官の役割がありました。でも、裁判の判決を下すのは王だけの仕事ではありません。当時のイスラエルには町のもめごと相談所みたいなものがあって、町の長老たちが人々の訴えを聞いて問題を解決していました。だけど、この案件は、そこでは対処しきれなかった。それで王様のところまで上がってきたのです。

では、なぜ対処できなかったのでしょう。当時の裁判で最も有効なものは、複数の証人の証言でした。普通なら、赤ちゃんを取り上げた助産師たちや、家族や近所の人が「この子はA子さんの子に間違いありません」って証言してくれれば、それで済むことでした。しかし、この二人に関してはそれがなかった。目の前にいる赤ちゃんがA子さんの子なのか、B子さんの子なのか、これを証言できる人が誰もいないのです。

これが、この裁判の最も難しいところです。判断基準となる証人がいない。だから嘘をついている方を見破るしかないのです。ところが、どっちが嘘をついているのかわからない。そんな状況だったのです。しかも、たとえB子さんが嘘をついているだろうと思ったとしても、思っただけでは有罪にはできません。

その裁判において、ソロモン王は大胆な判決を下します。なんと「赤ちゃんを半分に切って、それぞれに渡せ」と言ったのです。このことは、赤ちゃんを殺せということです。ソロモンは、「本当の母親であれば、この判決を飲むことはできないはずだ。母の愛がそこにあるはずだ」と、その母の愛にかけたのです。見事、ソロモンの読みは的中しました。A子さんは、「殺すくらいならB子さんにあげてください。決してその子を殺さないで」と訴えたのです。この言葉が出た瞬間に、そこにいたすべての人が、A子さんが正しかったことが分かりました。そしてB子さんが有罪である事をみんなが確信したはずです。B子さん当人も、それを悟ったことでしょう。

もし、この時、B子さんが自分の罪を認め、神さまに赦しを乞うていたら、救われたかもしれません。もしかしたら、ソロモン王は、B子さんの悔い改めを願っていたのかもしれません。

B子さんはどんな気持ちで、死んだ自分の息子とA子さんの息子を取り替えたんでしょうか。A子さんの赤ちゃんを自分の子供にできれば、それでいい。他の人の命や愛するものを奪おうとも、自分の幸せを優先しようとする。もしくは、なんで自分ばっかりこんな目に遭うのか。あいつも同じ目に遭えばいい。苦しめばいい。そんなふうに思ってしまう。これが、罪

が深まってしまっている人の自己中心の心です。
　私たちも、命に関わることまではやらなくとも、自分さえよければいいという思いに駆られることはないでしょうか。自分の幸せのために誰かを不幸にしていないか、自分が得をするために誰かが損をしていないか、自分が上に行くために誰かを蹴落としていないか、そういったことを今一度、自らに問い直していくこと大切さを教えられます。

　また、同時に私たちは、我が子の命を救うために、自分の命をかけているA子さんの姿にも心を留めたいと思うのです。王の判決を前にして、必死に我が子の命が救われることを訴える。B子さんの子どもになって命が救われるのであれば、自分は偽証罪で死刑になっても構わない、その覚悟をもってA子さんは王の前に立つのです。
　イエス・キリストは、「父よ、彼らをお許しください。自分が何をしているのか知らないのです」（ルカ　23:34）、そう言って父なる神に必死に祈り、十字架に架けられ、死なれました。このキリストの姿にA子さんの姿は、どこか重なりはしないでしょうか。そうであれば、ここで救われた赤ちゃんは、私たちと重なりはしないでしょうか。
　本来なら、神の判決を受けて切り捨てられるべき私が、どういうわけか赦された。イエスさまにより生かされ、救われた。その救われた命を私たちは、どのように生きるべきなのでしょうか。

　つらい境遇や、試練は突然やって来ます。でも、そんな時、悲劇のヒロインになったり、自暴自棄になったりするのではなくて、神様に助けをいただきながら、自分のすべきことを祈り求めていく。その中で、回復や希望が、神さまによって備えられていく。そう信じていくことができる者でありたいと願います。